

Able Art Movement 30th

これからの
30年を
耕す
問い





1995年に始動したエイブル・アート・ムーブメント。

障害の有無に関わらず、社会的に弱い立場にある人たちのニーズから社会を構想し、“オルタナティブな生のあり方”を提案してきた市民芸術運動は、今年で30周年を迎えます。この間、国内外、分野を超え、さまざまな実践が生まれました。

それぞれの実践は、非連続のようでいて地下茎のように見えないところでつながり、共鳴しながら、新たな芽や兆しを生む土壌を育んできました。それはまた、水のながれのようにでもあります。あるときは合流し、また離れ、それぞれの場所で形を変えながら各地での活動は継続してきました。

このたび30周年を記念し、このムーブメントの実践における“今”と“これから”を共有します。「人間らしく豊かに生きること」を可能にするアートの力を改めて確かめ合い、それぞれに問いを持ち帰る時間になればと思います。ページをめくるたびに、心のなかに、小さな問いが生まれてくるかもしれません。新たな問いと向き合いながら、これからの30年をともに歩んでいきましょう。

この本の使い方

エイブル・アート・ムーブメント30周年記念フォーラム開催にあわせて作成した、問いを通してこれからを考えるための本です。エイブル・アート・ムーブメントに関わってきた人たちが持ち寄った“これから、みんなで考えたい問い”を並べました。これらの問いには、決まった答えはありません。また、どのページから読んでいただいても構いません。ぜひ、一緒に活動する人たちや、これから出会う人たちとの対話の種としてご活用ください。この冊子が、これからの30年を耕す一歩につながれば幸いです。

これからの30年も、
いきいきと生きるためには、
どんなことが必要？

一人ひとりの人間が持つて生まれた「傾き」を
「傾き」のまま受け入れ、ともに活動するには？

障害のあるメンバーの言葉を聞き取るうち、
その言葉、発話の音をまねてみたくなる。
まねをするのは失礼なこと？

ひとつの行為が、
遊びにも唯一無二の表現にも見える。
遊びと即興の境目は、存在するの？

障害のある人の表現から、
今はまだないパフォーマンスの
ジャンルは生まれうるか？

体験や出会い、発見において、

感覚や感性の違いは人の数ほどあるはずなのに、
なぜそこに能力評価が差し込まれてしまうのか？

病気や加齢、障害が重度化しても

表現活動や自分らしい暮らしを続けられるための
環境や道具はどう整える？

障害のある人が、
家族や施設との関係だけでなく、
友人や仲間をつくり、
依存しあえる先を増やしていくには？

私たちはどのような場をつくり、
どのような営みを育んでいきたいのだろうか？

ケアし、ケアされる関係から生まれるものとは？

誰かのために行うことと、

より多くの人にとって意味のあることの

両立はいかにして可能だろうか？

声をあげられない
障害のある人たちの声に
耳を傾けるためには？

アクセシビリティを考える前に、
「そこにアクセスしたい！」と考える
気持ちはどうしたら生みだせる？

「就労」以外の楽しい社会参加を
実現するためにできることは？

「できないこと」よりも、

「できること」に集中できる環境づくりには
どんなことが必要だろうか？

違和感があっても愛でられるもの、
失敗も成功もないものづくりは、
どのように可能だろうか？

素材に触れる心地よさなど、

つくる過程の喜びを大切にしたいものづくりを、
どうやって伝え、続けていけるだろうか？

産業や文化、自然環境が変化するなか、
福祉の現場でのものづくりは、
どう変化していくだろう？
「つくる」と「使う」の先は、
どのように考えられるだろう？

コミュニティや生活のなかで、
アートに取り組むことが増えてきた今、
文化施設がもつ可能性とは？

特別支援学校と福祉施設のあいだでできることは？

障害のある人の表現がもつ可能性を
まだ届けられていない相手は誰だろう？

エイブル・アート・ムーブメントの共鳴が
より多くの人々へと広がるためには何ができる？

オンライン空間は、
ケアや福祉の可能性をどう広げる？

デジタル技術の普及や利用が進むと、
障害のある人のアート活動や仕事はどう変化する？

福祉制度やサービスで、

「できること」「できないこと」。

その狭間や外側にあるものはなんだろう？

数値では測りきれない活動の
価値や存在の魅力を伝えるためには、
どうしたらいいだろう？

これからの社会において「市民運動」は成り立つか？

コミュニティに関わる活動は、
社会全体を愛容させうるか？

市民運動から大衆運動へ、

そしてカルチャーとして根づくためには、
どのような戦略が必要になるだろう？

学び、楽しみながら関心を広げていく、
学びながら自らをほぐしていけるような、
そんな生涯学習のありかたとは？

「障害者芸術」は、

この30年で捉え直すことができたのか？

嘘や暴力がまかり通る時代に
エイブル・アートは何ができ、何ができないのか？

多様性という言葉や考え方を追求すると、
「障害」という言葉やそれを取り巻く制度は、
どう変わっていくだろう？

AI前提の社会において、
社会的に弱い立場の人たちの
豊かな暮らしとはどのようなもの？

30年後、福祉の現場を支えているのは誰だろう？

誰もを取り残されない社会は、
どういう社会なんだろう？

今も100年後も変わらずに、
私たちが追い求めるものはなんだろう？

エイブル・アート・ムーブメント30周年記念

Space for the Next Things もっと自由に、もっとオルタナティブに

2025.11.28(金)ー30(日)

京都市京セラ美術館 講演室、光の広間

主催：一般財団法人たんぼの家

共催：NPO法人エイブル・アート・ジャパン

後援：京都市

協力：京都市京セラ美術館

助成：公益財団法人パブリックリソース財団「矢倉孝一 メモリアル基金」「井上圭子

メモリアル基金」「アート&ヘルス基金・Good Job! 基金」共同助成プログラム

協賛：トヨタ自動車株式会社、株式会社中川政七商店、株式会社ハーバー研究所、

株式会社内田洋行、株式会社ソフィア、株式会社桶谷ホールディングス、

菅公学生服株式会社、関西電力株式会社、近畿労働金庫、

株式会社クリエイティブマンプロダクション、サン美術印刷株式会社、

山陽製紙株式会社、JOHNAN株式会社、タビオ奈良株式会社、

株式会社ノンストレス、三井不動産レジデンシャル株式会社、

リコージャパン株式会社大阪支社、株式会社リブドゥコーポレーション

エイブル・アート・ムーブメント30周年記念

Space for the Next Things もっと自由に、もっとオルタナティブに

『これからの30年を耕す問い』

2025年11月28日第1刷発行

発行：一般財団法人たんぼの家

企画：一般財団法人たんぼの家+MUESUM

編集：多田智美・白井瞭[MUESUM]

デザイン：原田祐馬・白川温未[UMA/design farm]

数字書体(問い)：松本悟[たんぼの家アートセンターHANA] 読み上げテキスト



※本冊子を作成にあたり、さまざまな方にご協力をいただきました。深く御礼を申し上げます。

もし社会のなかで、
なんでもひとつ変えられとしたり、何を变えたい？

